

徳島市民病院 85 周年記念事業

シンボルツリー（蜂須賀桜）の植樹式

平成 25 年 2 月 2 日



～ごあいさつ～

徳島市民病院 院長 惣中 康秀

これからの徳島市民病院の新たな象徴として、シンボルツリーがほしいという希望がありました。シンボルツリーには、日本に馴染み深く徳島市の花としても制定されている桜に決定し、色々な桜の中から「蜂須賀桜」を植樹することとなりました。

この苗木は、特定非営利活動法人「蜂須賀桜と武家屋敷の会」よりご寄贈いただき、貴団体理事長でございます桑原信義様他皆様におかれましては、深く感謝するとともに御礼を申し上げます。

この蜂須賀桜を大切に育てまして、蜂須賀桜といえは市民病院と言われるようになりたいと思います。



～「恕(じょ)の木」について～

徳島市病院事業管理者 露口 勝

孔子の高名な弟子の一人、子貢があるとき、孔子に質問した。「先生、たった一語で、一生それを守っていれば間違いのない人生を送れる、そういう言葉がありますか」と。孔子は「それは恕かな。自分がされたくないことは人にしてはならない」と答えた。つまり人を思いやるということである。それが恕だと説いた。他を受け入れ、認め、許し、その気持ちを思いやる。自分のことと同じように人のことを考える。そのことこそ、人生で一番大切なことだと孔子は教えたのである。

徳島市民病院は「思いやり・信頼・安心」を病院の理念として掲げています。病院職員の思いやりの心を孔子の言葉「恕」に託し、シンボルツリー（蜂須賀桜）を「恕の木」と命名しました。



～85周年を祝して～

特定非営利活動法人 蜂須賀桜と武家屋敷の会 理事長 桑原 信義

徳島市民病院 85周年おめでとうございます。

また、この蜂須賀桜をシンボルツリーとしてご採用いただき大変光栄に思います。

蜂須賀桜は、明治維新のときに徳島城御殿にあった桜の木を原田家に託し育て続けた由緒ある桜であり、明治維新の廃藩置県や第二次世界大戦の徳島空襲を幸いにも生き延びた「運の強い」桜です。この生命力で徳島市民病院のシンボルとして、末永く花を咲かせ続け、病院関係者や患者様の「希望の花」となることを期待していますので、大事に育てて大きな木にしていただきたいと思います。

先ほど管理者から「恕の木」と命名していただきました。これから私どもが色々なところで蜂須賀桜を植樹していく中、このことを話題にしていきたいと思います。

この「恕」の言葉は、社会生活をしていく上でとても大事であり、私自身も戒めの言葉として、団体の運営を行っていきたくてと覚悟を新たにしたいところでございます。

本日はありがとうございました。



今から 15 年前、なぜ 85 周年を記念として事業が行われたのか不思議に思ったことを今でも憶えています。

当時の露口病院事業管理者や惣中院長は、そのとき新病院となって 5 年を経過した病院に違った形の財産を後人たちへ残し伝承しようとしたのだと思います。それは、「恕の木」に込められた願いでもあり、当院の理念「思いやり・信頼・安心」ではないでしょうか。その思いが伝承されているからこそ、当院の全職員が毎日自分自身を省みることができ、この市民病院に誇りを持っている。この財産はそう簡単に作れるものではありません。

今となってみれば、たまたま 85 周年だったのかもしれませんが、そのタイミングでその事業が行われていなければ、今の市民病院はなかったのかもしれませんが。

2028 年 2 月吉日 (100 周年記念)

徳島市民病院 院長

こんな役割が果たせることを願いつつ、「恕の木」を大切に育てていきたいと思っています。

このたびは、蜂須賀桜をご寄贈いただきました特定非営利活動法人「蜂須賀桜と武家屋敷の会」をはじめご協力くださいました皆さまに深く感謝いたします。

